新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業

感覚をひらく

令和5年度 実施報告書

はじめに

「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」は、視覚だけでなく触覚や聴覚、対話を用いることで作品鑑賞の幅を広げ、より多くの方に向けて美術館をひらくことを目指してきました。今年度で７年目となり、見える・見えない人がともに所蔵品を手で触れて鑑賞するワークショップや、盲学校と美術館が連携して行う授業、所蔵作品についての触察ツールの制作など、定着してきた活動もあります。今年度も本事業の推進に温かいご支援、ご協力をいただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

今年度は、作家の中村裕太氏と連携して、洋画家の長谷川三郎の抽象絵画をテーマにした展示・プログラムを開発し、10 月から 12 月にかけて館内で体験型の展覧会を行いました。５月以降に新型コロナウイルスが５類に移行したことで多くの方にご来場いただき、作品に手で触れたり対話をしたりしながら抽象絵画の世界を味わっていただく機会を作ることができました。また、所蔵作品を触覚で味わう鑑賞ツール「さわるコレクション」も、２つの作品について制作を行いました。磁力を用いた表現を模索することで、これまでとは一味違う、さわる図の制作・活用に新たな可能性を示すものになったと自負しています。

誰もが楽しめる美術鑑賞のあり方を探ることには定石がなく、美術館に十分なノウハウがあるわけでもありません。だからこそ「感覚をひらく」では、関係者・参加者の方とともに試行錯誤し、常に議論を重ねながら方向性を探ってきました。本冊子では令和５年度の取り組みの一端を紹介しています。ぜひご高覧いただき「感覚をひらく」事業について広く知っていただければ幸いです。

令和６年２月末日

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
委員長（京都国立近代美術館長）
福永　治

本書は、新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会による「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」の、令和 5 年度の取り組みの記録と成果の報告書である。
本書の編集は、京都国立近代美術館教育普及室がおこなった。
本事業ならびに本書の刊行は、「令和 5 年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）」の助成を受けた。

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会

委員長	福永　　治	京都国立近代美術館長
副委員長	田渕　茂彦	京都府立盲学校副校長
委員〔50 音順〕	佐藤　優香	東京大学大学院情報学環客員研究員
	塩瀬　隆之	京都大学総合博物館准教授
	辰巳　明久	京都市立芸術大学ビジュアルデザイン研究室教授
	広瀬 浩二郎	国立民族学博物館教授
	四元　秀和	京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課 文化力活用創生担当課長
	渡邉　美香	大阪教育大学表現活動教育系美術・書道教育部門准教授
監事	髙木　秀夫	京都府健康福祉部障害者支援課参事（精神・社会参加担当）

はじめに……1

1. 「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」について……4

1-1　概要……4
1-2　活動実績……5

2. ABC プロジェクト……6

2-1　概要……6
2-2　活動のプロセス……8
2-3　エデュケーショナル・スタディズ 04「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」……11
2-4　ABC コレクション・データベース Vol.3「長谷川三郎《蝶の軌跡》のイリュージョン」……16
2-5　関連プログラム……18
2-6　印刷物 ……20
2-7　他館での展覧会への協力……22

3. 美術館と盲学校との連携事業……23

3-1　狛犬ワークショップ（京都府立盲学校高等部）……23
3-2　鑑賞・制作ワークショップ（京都府立盲学校中学部）……26

4. さわるコレクション……31

4-1　概要……31
4-2　構成……32
4-3　検討プロセス……34

5. CONNECT ⇄ _ アートでうずうず つながる世界……36

5-1　概要……36
5-2　うずうず広場……37
5-3　筆談鑑賞会　かく⇄みる⇄つながる……39

6. 研究・普及活動……44

6-1　研究会「ひらくラボ」実施報告書／ 6-2　活動紹介コーナー……44

おわりに……45
【付録】新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会規約……47

1.「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」について

1-1 概要

本事業は京都国立近代美術館が中核館となり、地域の盲学校、大学、博物館等と連携して平成29（2017）年度から実施している。事業目的は、「みる」ことだけにとらわれず触覚や嗅覚、聴覚や対話を用いた鑑賞活動を通して、見える／見えないに関わらず誰もが享受できる（ユニバーサルな）作品鑑賞のあり方を模索すること。それを通して、美術館をさまざまな背景や感性を持つ人たちが関わり合う場としていくことも目指している。

令和５年度の主な実施事業は以下の通りで、一部は令和５年度文化庁 Innovate MUSEUM 事業の助成を得て実施した。

■ ABC プロジェクト

京都国立近代美術館の所蔵作品を多様な感覚を使って味わい、新たな魅力を発見するための鑑賞プログラムを開発する。実働の枠組みとして、作家［Artist］、視覚障害のある方［Blind/ partially sighted］、美術館の学芸員［Curator］による協働関係を構築し、三者がそれぞれの専門性や感性を生かしながら携わる。

■さわる鑑賞ツール「さわるコレクション」

「さわるコレクション」は、京都国立近代美術館の所蔵作品について、触図と文章でその特徴を紹介する触察ツール。視覚障害のある当事者や専門家、印刷会社と協働して制作する。１作品あたり 1,000 部制作し、全国の盲学校、ライトハウス、点字図書館を中心に配布するほか、希望する個人・団体への配布を随時行っている。

■身体感覚で楽しむプログラム（盲学校との連携事業を含む）

所蔵作品や鑑賞ツールを活用しながら、さわる・きく・対話するといった方法による鑑賞プログラムを定期的に開催する。また、盲学校における鑑賞教育の充実を目指し、京都府立盲学校などと連携した取り組みを継続的に行いその成果を発信する。

■「CONNECT ⇄ _」プログラム

共生や多様性を考えるプロジェクト「CONNECT ⇄ _」に京都国立近代美術館として参画し、ワークショップ等を実施する。

■研究・普及活動

本事業の成果や課題を発信し、視覚だけによらないユニバーサルな鑑賞について普及を行う。さらに各地の美術館等における事例を共有し、関係者と共に議論を深める場を設定する。

●実　施　中　核　館：京都国立近代美術館
●その他の協力団体：大阪教育大学／京都市／きょうと障害者文化芸術推進機構／京都市立芸術大学／京都大学総合博物館／京都府／京都府立盲学校／国立民族学博物館
（以上、50 音順）

1-2 活動実績

実行委員会の開催	第 1 回実行委員会　2023 年 8 月 2 日（水） 於：京都国立近代美術館 1 階講堂およびオンライン 第 2 回実行委員会　2024 年 2 月 28 日（水） 於：京都国立近代美術館 1 階講堂
作家、視覚障害のある方、美術館が協働したプログラムの開発（ABC プロジェクト）	内容検討　2022 年 9 月～ 2023 年 9 月 ●展示：エデュケーショナル・スタディズ 04 「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」 2023 年 10 月 5 日（木）～ 12 月 17 日（日） 於：京都国立近代美術館 4 階コレクション・ギャラリー ［関連イベント］・ギャラリートーク　2023 年 10 月 14 日（土） ・トークセッション　2023 年 11 月 5 日（日） ●ウェブサイト：ABC コレクション・データベース Vol.3 「長谷川三郎《蝶の軌跡》のイリュージョン」 2023 年 10 月 5 日（木）公開
「さわるコレクション」の制作	制作期間　2022 年 10 月～ 2024 年 3 月 ・サンプル制作・検討会議　2022 年 10 月～ ・組み立て　2024 年 2 月～ 3 月
盲学校との連携事業	●狛犬ワークショップ（京都府立盲学校高等部） 2023 年 7 月 19 日（火）　於：京都府立盲学校高等部 多目的室 ・作品展示　2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日） 於：京都国立近代美術館 1 階ロビー「うずうず広場」 ●鑑賞・制作ワークショップ（京都府立盲学校中学部） 2023 年 12 月 12 日（火） 於：京都国立近代美術館 1 階ロビー／ 4 階コレクション・ギャラリー
「CONNECT ⇄ _」プログラム	●うずうず広場　2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日） 於：京都国立近代美術館 1 階ロビー ●筆談鑑賞会　かく⇄みる⇄つながる 2023 年 12 月 10 日（日）　於：京都国立近代美術館

2. ABC プロジェクト

2-1 概要

「ABC プロジェクト」とは、作家（Artist）、視覚障害のある方（Blind/ partially sighted）、学芸員（Curator）の三者がそれぞれの専門性・経験・感性を生かして連携し、京都国立近代美術館の所蔵作品をテーマに「みる」ことだけでなく「さわる」「きく」などの方法を用いた新たな鑑賞プログラムを開発する取り組みである。「感覚をひらく」事業の一環として 2020 年度に立ち上げた。見えない・見えにくい方と協働することで、視覚中心的だった従来の作品鑑賞のあり方を問い直し、所蔵作品の新たな魅力を探っていくことをねらいとしている。そして作家とも協働し、また美術館の外に持ち出しても活用可能な鑑賞ツールとして一般化していくことも要件として進めてきた。

これまで作家の中村裕太氏、視覚に障害のある安原理恵氏、美術館、そしてデザイナーによる協働関係を築きながら２つのプロジェクトを行ってきた。そして 2022-23 年度は同じチームの第３弾のプロジェクトとして「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」を実施した。中心的な作品として取り上げたのは、日本の抽象絵画のパイオニア的存在である洋画家の長谷川三郎（1906-1957）による《蝶の軌跡》である。

長谷川は戦前に洋画の抽象表現に取り組んだ第一人者である。1937 年に村井正誠、瑛九らと「自由美術家協会」を結成し、第一回展に《蝶の軌跡》を含む 14 点を出品。また同じ年に、ピエト・モンドリアンやハンス・アルプなどの海外の抽象芸術を紹介した『アブストラクトアート』を刊行している。《蝶の軌跡》は、8 の字の形や楕円、点々や荒い筆致で構成されているが、それらによって何か具体的なモチーフが明示されているわけではない。またタイトルからチョウの動いた跡であることは示唆されるが、チョウ自体の姿はなく、どれが軌跡であるかも判然としない。しかし画面のなかで何かが動いていたような気配は感じ取ることができる。

このように本作は多様な解釈に開かれた作品で、さらに目には見えない気配のようなものも内包しているように感じられる。こうした特徴を踏まえたうえで、見える・見えないに関わらず本作の魅力を共有し鑑賞を深める手立てを探ることを目指し、プロジェクトを進行した。

2022 年 9 月より ABC のメンバーで文献調査、リサーチ、フィールドワーク、収録などを進め、その成果を踏まえ作家の中村氏が手で触れることができる鑑賞ツールを 14 点制作した。2023 年 10 月から美術館のコレクション・ギャラリーにて体験型の展示を行ったほか、《蝶の軌跡》についてオンライン上でさまざまな切り口から読み解くデータベース（ウェブサイト）も公開した。

［撮影：表恒匡］

〈プロジェクトメンバー〉

運　　営：中村裕太（作家）／安原理恵／松山沙樹、牧口千夏、渡辺亜由美、吉澤あき（京都国立近代美術館）

デザイン：仲村健太郎・小林加代子（Studio Kentaro Nakamura）

特別協力：甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー

〈作家プロフィール〉

中村裕太（なかむら・ゆうた）｜ 1983 年東京生まれ、京都在住。2011 年京都精華大学博士後期課程修了。博士（芸術）。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行う。近年の展示・プロジェクトに「第 17 回イスタンブール・ビエンナーレ」（バリン・ハン、2022 年）、「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」（京都国立近代美術館、2022 年）、「万物資生｜中村裕太は、資生堂と　　を調合する」（資生堂ギャラリー、2022 年）、「ツボ _ ノ _ ナカ _ ハ _ ナンダロナ？」（京都国立近代美術館、2020 年）、「in number, new world / 四海の数」（芦屋市立美術博物館、2019 年）。著書に『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019 年）。

2-2 活動のプロセス

プロジェクトのテーマ、方向性についての検討・調査（2022 年 9 月～）

2022 年度は主に中村氏と美術館で企画の方向性を議論した。過去 2 回のプロジェクトで扱った石黒宗麿や河井寛次郎の陶芸作品とは異なり、《蝶の軌跡》は平面作品ゆえ、作品自体に触れることができない。絵画を視覚障害のある方へ伝える方法のひとつとして、たとえば美術館などで、作品の構図やモチーフの輪郭などを凹凸のある印刷で表した「触図」を作成することがある。「感覚をひらく」事業でも「さわるコレクション」という触察ツールを制作してきた。従来の触図制作の方法に倣えば、本作に描かれた 8 の字形や十字模様を凹凸表現であらわすことで終わるだろう。しかし構図や形状を伝えるだけにとどまらず、この抽象絵画からさまざまな想像や見立てが生まれるということを共有することで鑑賞がより深まるのではないか。本プロジェクトではそうした議論を基に、さまざまな視点から本作を多角的に読み解くために、文献調査やリサーチ、フィールドワーク等を進めた。

切り口のひとつとして、中村氏は動物行動学という領域に着目した。そして、動物が世界をとらえる独自の視点である「環世界」を研究したヤーコプ・フォン・ユクスキュルの『生物から見た世界』や、チョウの飛ぶ道などを突き止めた日高敏隆『チョウはなぜ飛ぶか』などの著作にふれ、見える・見えないという人間の知覚を超えて、新たな視点から《蝶の軌跡》を読み解くことができるのではないかなど、議論を重ねた。

「CONNECT ⇄ _」でのプレ展示（2022 年 12 月）

2022 年度「CONNECT ⇄ _」事業の一環として、京都国立近代美術館 1 階ロビーに設えた「こねこねの中庭」の一角にて、中村裕太《岐阜チョウの道》（2018 年）を再構成して展示した。

青少年科学センターでのフィールドワーク（2023 年 4 月末）

2023 年度からは安原氏も交えた検討を進めていった。 4 月には京都市青少年科学センター（伏見区）を訪れ、敷地内に設置された「チョウの家」内や屋外の蜜柑の木のまわりをチョウが飛ぶ様子などを観察した。

2022 年度「CONNECT ⇄ _」での中村裕太《岐阜チョウの道》の展示（中央）

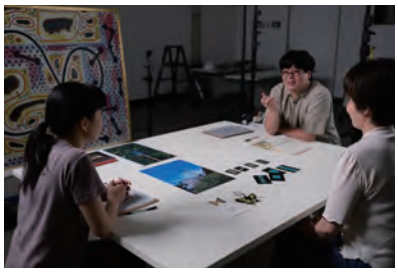
京都市青少年科学センター「チョウの家」での観察

作品調査（2023 年 6 月初旬）

甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー（兵庫県芦屋市）の協力を得て、同ギャラリー所蔵の長谷川作品の調査を行った。《蝶の軌跡》とともに 1937 年の第一回自由美術家協会展に出品された《都制》《新物理学 B》や、現在ギャラリーで調査研究が進められている同時代のコラージュやドローイングなどを実見した。

ABC でのワークショップと撮影（2023 年 6 月末）

これまでの文献調査、フィールドワーク、議論などを踏まえて、もう一度《蝶の軌跡》に立ち返り、どのようにこの作品の世界を味わうことができるのか、ABC のメンバーで実践してみることとした。《蝶の軌跡》の前に、作品と同じサイズのテーブルを用意し、中村氏、安原氏、美術館スタッフの松山が、作品に向き合うようにして座った。そして、言葉による作品鑑賞をしたり、作品の筆致をなぞるように身体を動かしてみたり、長谷川の著作や同時代の批評を読みながら美術史的な側面から作品を検証したりした。その後、作品をもとに触図制作ワークショップなどを行った。この一連の様子を俯瞰写真と手持ちカメラ、音声、映像で記録した。



［撮影：表恒匡（上 2 枚）］

ウェブサイト、チラシについて打ち合わせ（2023 年 7 ～ 8 月）

ABC でのワークショップの成果を踏まえ、ウェブサイトに盛り込む情報やデザインの精査を進めた。あわせて、広報チラシについても具体的な検討を始めた。視覚的なデザインのみならず、紙の種類や触覚的な体験ができる要素をどのように取り入れるかなどを話し合った。

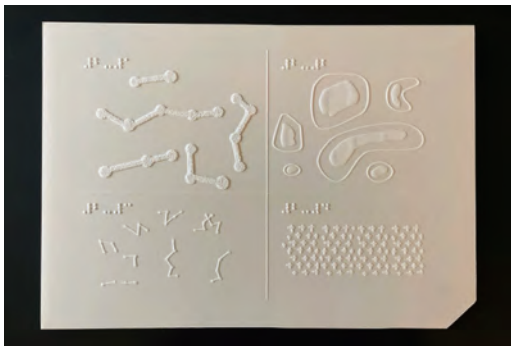
手で触れる鑑賞ツール、会場構成について打ち合わせ（2023 年 8 ～ 9 月）

中村氏と美術館スタッフを中心に、展示構成や作品レイアウトの検討を進めた。《蝶の軌跡》を多視点から考察するために、村井正誠やハンス・アルプなどの長谷川三郎と関連する所蔵作品も展

示することとした。そして手で触れる鑑賞ツールについては14点の「触図」を制作することとなった。

展示スペースとしてコレクション・ギャラリー中央の部屋とその前壁面を用いることとし、作品のレイアウトについても議論を重ねた。所蔵作品と触図は関連しているものの、その作品を説明するために一対一対応で触図を用意するのではなく、14点の触図をすべて《蝶の軌跡》を読み解く要素として機能させることができないか。そうした意図などから「視覚的に作品を味わう空間（所蔵作品等の展示）」と「手で触れて味わう空間（触図の展示）」とに分ける会場構成になった。

また、中村氏による触図は作品のモチーフを省略したりデフォルメしたりして制作され、作家の解釈を通したものとなる。その一方で、情報保障の観点から、視覚障害のある方にも元になる作品の基本的な情報を伝えることが必要であると考えた。そこで安原氏と美術館が協議を重ね、《蝶の軌跡》について構図や主要モチーフなどを抜き出した触図を立体コピー機（Easy Tactix）で制作し、解説とともに視覚障害のある来場者にお渡しすることとした。



立体コピー機で作成した、全体の構図を表す触図（左）と主要モチーフを抜き出した触図（右）

2-3 エデュケーショナル・スタディズ 04
「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」

実施日時｜2023 年 10 月 5 日（木）～ 12 月 17 日（日）
会　　場｜京都国立近代美術館 4 階 コレクション・ギャラリー内
特別協力｜甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー
来場者数｜ 24,215 名（コレクション・ギャラリーの入場者数）

■制作協力

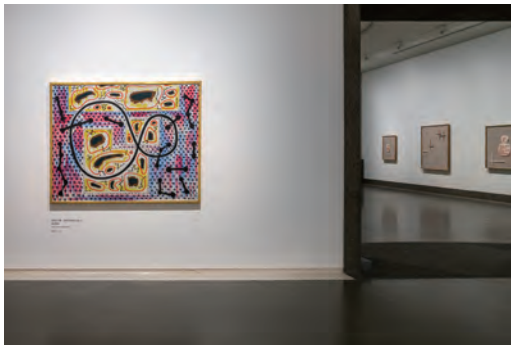
写真：表恒匡
音声・動画：麥生田兵吾
フライヤーデザイン・ウェブサイト制作：
Studio Kentaro Nakamura
会場什器製作：タケダ工作所

［以下、会場撮影すべて：表恒匡］

■出品作品

長谷川三郎《蝶の軌跡》1937 年、油彩画布、京都国立近代美術館蔵
小出楢重《卓上静物》1928 年、油彩画布、京都国立近代美術館蔵
村井正誠《Ile de la Cité》1939 年、油彩画布、京都国立近代美術館蔵
ピエト・モンドリアン《コンポジション（プラスとマイナスのための習作）》1916 年頃、油彩、鉛筆、画布、京都国立近代美術館蔵
ジャン (ハンス) ・アルプ《7 アルパーデン：アルプ・アルバム（『メルツ』第 5 号）より「Ⅶ　アラビア数字の 8」》1923 年、リトグラフ、京都国立近代美術館蔵
瑛九《デッサン》1937 年、インク、紙、個人蔵
吉原治良《作品》1936 年、油彩画布、京都国立近代美術館蔵
中村裕太《チョウの飛ぶ道｜京都府伏見区深草池ノ内町》2023 年、ラムダプリント、紐、作家蔵
中村裕太《チョウの飛ぶ道｜岐阜県美濃加茂市川合町》2018 年、映像、インク、紙、竹、木、作家蔵
長谷川三郎《無題 A》制作年不詳、インク、墨、紙／コラージュ、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー蔵
長谷川三郎《無題 B》制作年不詳、インク、墨、紙／コラージュ、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー蔵
長谷川三郎《無題 C》制作年不詳、墨、紙／コラージュ、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー蔵
長谷川三郎《無題 D》制作年不詳、インク、墨、紙／コラージュ、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー蔵
長谷川三郎《無題》制作年不詳、インク、紙／ドローイング、甲南学園長谷川三郎記念ギャラリー蔵
中村裕太《チョウの軌跡》2023 年、音声、木、画布、陶（全 14 点組）

■展示について



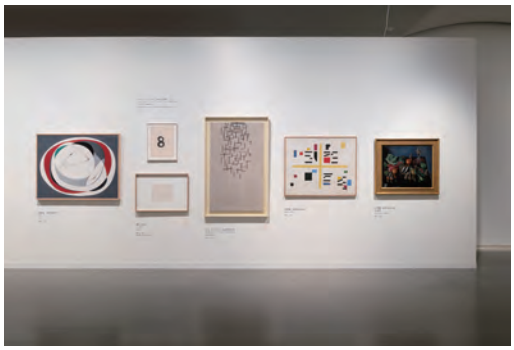
2022年度から行ってきたABCとデザインチームによる協働の成果として、2023年10月から12月にかけてコレクション・ギャラリーで体験型の展示を開催した。

展示は２つの空間から構成される。１つ目の空間はコレクション・ギャラリーの入口からすぐのスペースで、２つの壁面に長谷川三郎《蝶の軌跡》を含めた所蔵作品、中村氏による写真と映像インスタレーション、そして長谷川三郎記念ギャラリーからの借用作品を展示した。計14点の各作品の脇には作品番号を大きく振った。また、《蝶の軌跡》のそばでは、中村・安原・松山の三者が言葉を交わしてこの作品を鑑賞した際の音声が流れるようにした。

隣接する２つ目の部屋には、中村氏が制作した手で触れることができる鑑賞ツール（「触図」）を14点展示し、中村・安原・松山が《蝶の軌跡》の前で行ったワークショップの際の音声を流した。また会場では、ハンドアウト（墨字版はB1表裏カラー印刷、点字版はB5版冊子）を配布。ここには、展示構成の意図や《蝶の軌跡》を読み解く試みについて中村氏の視点から記述した文章と、出品作品（触図を除く）の図版および作品リストを掲載した。

本展では《蝶の軌跡》を読み解くヒントとして以下のようなテーマを設定した。なお、来場者自身が会場を回遊しながら能動的に《蝶の軌跡》の解釈を行えるよう、会場の壁面等にはこれらのテーマはあえて掲出せず、テーマごとに、ある程度まとまりをもたせて作品を展示した。

美術史から読み解く



ここでは《蝶の軌跡》と、美術館の所蔵作品からセレクトした長谷川の関連作家の作品を紹介した。具体的には、長谷川が大阪の信濃橋洋画研究所で師事した小出楢重（1887-1931）の静物画、1937年に共に自由美術家協会を立ち上げた村井正誠（1905-1999）の抽象絵画、著書『アブストラクトアート』の中で海外の抽象作家として紹介されているピエト・モンドリアン（1872-1944）の油彩とハンス・アルプ（1886-1966）の版画、フォトグラムの手法に取り組んだ瑛九（1911-1960）のドローイング、そして長谷川と交流のあった吉原治良（1905-1972）の抽象絵画である。

中村氏は、関連作家の作品との間に何らかの類似性や相似性を見出すことで、《蝶の軌跡》の筆致の特徴について考察できないかと考えたという。たとえばモンドリアン作品のプラス模様やアルプ作品の「８」のモチーフは《蝶の軌跡》との視覚的な相似性を感じさせ、村井の抽象絵画は都市を俯瞰したようにも見え、《蝶の軌跡》との類似性を漂わせている。

動物行動学から読み解く

《蝶の軌跡》をさまざまな視点から読み解く試みとして、動物行動学にも着目した。たとえばヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環世界」という概念によれば、生物は人間とは全く異なる視点で身の周りの情報を知覚しており、カラス、ダニ、犬、ミツバチなど、それぞれの生物が独自の環世界を持っているという。また、チョウの生態については日高敏隆が詳細に研究を行っている。日高はオスのチョウがメスを見つける際の指標として、ストライプモデルという幾何学的なパターンがあることを見つけ出した。また一部のチョウは、ある法則性をもって飛ぶ「チョウ道」を持っていることも明らかになっている。

こうした研究成果や中村氏が実際にチョウの生態を観察することで制作した《チョウの飛ぶ道》をあわせて展示した。そして、動物行動学の視点を踏まえて《蝶の軌跡》を鑑賞することで、鑑賞者が何か違う印象を受け取ったり、新たな想像が膨らんだりするよう促した。

長谷川のドローイング（紙コラージュ）作品から読み解く

ここでは甲南学園長谷川三郎記念ギャラリーが所蔵する長谷川のドローイングや紙によるコラージュの作品 5 点を紹介した。《無題 A ～ D》は 1937 年の美術雑誌『みづゑ』に図版が掲載されており、《蝶の軌跡》と同じ頃に制作されたことが推測される。ペンや墨で線を描いた紙が切り抜いて重ね合わされ、穴の開いた部分から下の紙の線の一部が見えるなど、複層的な画面となっている。

長谷川は 1937 年の第一回自由美術家協会展に《蝶の軌跡》を含む 14 点の作品を出品している。その他の出品作品は、毛糸や小豆、定規を組み合わせるなど、素材、ジャンルもさまざまで、この時期に長谷川が、抽象表現の可能性を意欲的に模索していたことが推測される。《蝶の軌跡》を鑑賞した際に、「地図のよう」「風景を上から見ているように感じる」という感想が出ることがあるが、これらのコラージュ作品の背景に、複数のレイヤーを重ねて画面を構成していくことへの関心があったと推測するならば、《蝶の軌跡》でも、8 の字形や十字模様、四角形、星座のようなモチーフを重ね合わせて一枚の画面を構成していくことが意識された、と捉えることができるかもしれない。これらのドローイングとの比較を通して、長谷川の《蝶の軌跡》の制作プロセスに迫ることを試みた。

触れる図から読み解く

コレクション・ギャラリー中央の部屋には、中村氏が制作した 14 点の触図を展示し、誰でも自由に手で触れて鑑賞できる空間とした。

触図は、木枠に張られたキャンバスの上に厚みのある陶を貼り付けた仕様となっている。２色の土が用いられ、手で整形したのち表面を器具で伸ばして平滑にし、焼成後にさらに研磨している。中村氏は会期中のトークにて、今回の触図にふれることで鑑賞者が長谷川作品について思索を深められるよう、作家としての手あとが残りすぎないよう配慮したと語った。触図の大きさは最も大きいもので《蝶の軌跡》と同じ 130.1 × 161.5㎝であり、手で触れて鑑賞することを想定し、通常よりも作品展示の中心線をやや低く設定した。また一部の小さな触図については少し傾斜をつけて展示した。

触図の右下には同じ土で作られた 1 から 14 までの数字が貼り付けられ、それによってもうひとつの空間にある作品との対応関係が示される。たとえば小出楢重《卓上静物》にはさまざまな種類の野菜や魚などが所狭しと描かれているが、同じ数字の付いた触図では６つのくわいのみが登場する。この触図と対応する《卓上静物》のくわいについて中村は「机の各所に配置され、その芽はすべて右に傾いてい」ることで、画面の中でリズムが生まれているように感じ、触図では６つのくわいのみを表したという。他の作品についても、触図では絵の一部分だけが抜き出されたりクローズアップされたりと、中村氏の解釈を通した翻案がなされていることが明らかである。

近年は美術館等において、絵画の構図や主要なモチーフを凹凸のある手ざわり等で表したシートを制作する事例が増えている。しかしここでの触図は、それらとは異なる機能をもつものと言ってよいだろう。中村氏は今回の制作において、広瀬浩二郎氏による「『少ない要素から多くを生み出す』ことが触図制作の心得」という論を参考にしたと述べている。今回の触図は抽象絵画をさらに抽象化した表現で、要素が削ぎ落されているからこそ、鑑賞者が自由に想像する余白を持っていた。

さらに中村氏の触図は、《蝶の軌跡》を読み解いていくための断片として機能することも意図されていた。つまり鑑賞者がこれらの触図に１つずつ触れ、その体験やそこから想像したイメージが混ざり合うことによって、《蝶の軌跡》により深く迫る経験を生み出すことが目指されていた。

会期中の来場者の反応はさまざまであった。会場を何度も行き来してハンドアウトも読みながらさわっていくことで、断片どうしがつながって解釈が徐々に深まっていったという感想を持った方もおられた。一方で、特に目の見える方は、触れて鑑賞することに慣れていないため、1 ～ 2 点を片手で軽くさわって会場を後にするという姿も見られた。また展示の意図がはっきりと全面に出ない会場構成だったこともあり、難解な展示だという印象を持った方もいたようだった。

展示室には、ニーズや関心、それまでの鑑賞経験がさまざまな来場者が訪れる。今回の展示では、すべての来場者が同じようにふるまい、同じメッセージを持ち帰ることは意図しておらず、むしろ来場者が能動的に展示を体験しそれぞれの視点で《蝶の軌跡》を解釈することを重視して会場を設えた。他方で今回は、みる・さわる・対話する・想像するといった、そもそも作品にアプローチする方法自体が多くの来場者にとってなじみのある視覚中心的な鑑賞体験とは異なっていた。そのため、より深く作品と向き合うための意識づけとしての仕掛け、たとえば「みるモード」から「さわるモード」等に意識を向けるような文言や映像の設置について検討することも必要であったかもしれない。体験型の展示を行う場合、来場者の主体性と体験の深まりのバランスをさまざまに想定していくことの重要性を、改めて実感することとなった。

また今後の展開としては、今回の 14 点の触図を用いて館内外でのワークショップ等を行い、視覚だけによらない鑑賞の経験をより広く共有していくことを検討している。《蝶の軌跡》のさまざまな解釈を広げていくことはもちろんのこと、これまで十分な検証が行えていなかった「さわり方」についても具体的に考えていきたい。たとえば両手を使ってじっくりさわることで、具体的にどのような情報が得られたり、どんな想像が膨らんでいったりするのか。そうしたことを参加者の反応を参考にしながら検討を重ねていければと思っている。

2-4 ABC コレクション・データベース Vol.3
「長谷川三郎《蝶の軌跡》のイリュージョン」

ABC プロジェクトでは初年度より、美術館での体験型の展示と並行してウェブサイトを制作している。

今回は長谷川三郎《蝶の軌跡》をめぐって ABC メンバーで文献調査、リサーチ、フィールドワーク、作品調査、鑑賞ワークショップなどを重ねてきた。そうした活動を踏まえて 2023 年 6 月に中村裕太氏（A）、安原理恵氏（B）、美術館スタッフの松山沙樹（C）によるワークショップを行い（p.9 参照）、その様子を写真・音声・映像で記録した。ウェブサイトではここでの活動内容をもとに 14 の章に整理し、テキストと写真・映像を用いて構成した。
（制作：小林加代子・仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura））

ウェブサイト URL　https://www.momak.go.jp/senses/abc/hasegawa/

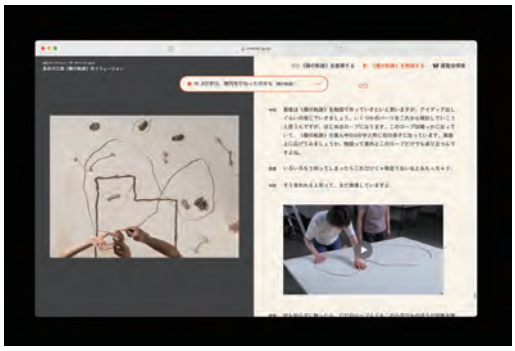
●《蝶の軌跡》を散策する

トップページには、ABC（中村・安原・松山）が《蝶の軌跡》を鑑賞した際の対話記録から抜き出した 14 のキーワードと写真（GIF 画像）が画面内にちりばめられている。たとえば地図アプリで 1 つの場所をクローズアップしていくと、個々の建物や道路の名前など、よりミクロな情報が表示されていく。こうした拡大・縮小による情報量の変化を今回のウェブサイトでも表現できないか議論を重ねた。そして、画面上でキーワードを拡大していくと単語からフレーズへ、さらにクローズアップすると対話のまとまりへとテキストの量が増えていくように、情報の解像度が変化する仕様とした。

また PC 画面で操作した際には、カーソルの動きに合わせて白色の点々が時間差で現れ、ユーザーの軌跡が視覚化される。さらにページを読み込むたびにキーワードと言葉の配置はランダムに入れ替わるようになっている。作品を解釈していく道筋は無数にあり、画面の中を自由に散策しながら、自分なりに作品を味わっていけるような経験を届けることも意識した。

●《蝶の軌跡》を解読する

トップ画面でキーワードや写真をクリックすると、該当する部分にジャンプし、テキスト、画像、映像による詳細情報にアクセスできる。



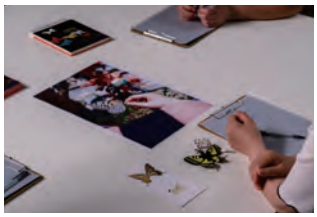
〈章立て〉

1. 噛み切られた四角（言葉）
2. 蝶々がいた気配（素振り）
3. ざざざというより、ささささ（長谷川三郎の略歴）
4. 8の字については記していない（自由美術家協会展）
5. 少ない要素で想像力が湧く（モンドリアンとアルプ）
6. ここのラインは繋がっていない（瑛九）
7. アゲハの方が四角っぽい（チョウの飛ぶ道）
8. プレートにタッチ（ストライプモデル）
9. 同じチョウを見ていたかも（長谷川三郎と日高敏隆）
10. えっ、絵と違うんですか？（美術館の触図）
11. 束から解いていく（新物理学B）
12. 小豆が押し返してくる（都制）
13. 手痕がありそうでない（ドローイング）
14. 8の字は、楕円をひねったのかも（蝶の軌跡）

ABCプロジェクトでは毎回、美術館での体験型展示とウェブサイトでの展開を並行して考えてきた。ウェブは視覚優位のメディアであり、ユニバーサルなものにするための工夫には困難もあるが、たとえば音声読み上げソフトを常用する視覚障害のある方が楽しめるような工夫など、視覚障害の当事者とデザイナーを交えて協議を重ねている。

今回のウェブサイトでは、キーワードと写真がランダムに表示される「《蝶の軌跡》を散策する」のページにおいて、読み上げ用のテキストも14のキーワードが毎回ランダムに表示されるよう設えた。また「《蝶の軌跡》を解読する」での掲載画像には代替テキストを添え、誰が何をしているところかといった説明をやや詳しく掲載した（以下を参照）。

左の画像の代替テキスト：「中村、1937年に出版された長谷川三郎『アブストラクトアート』を取り出す。安原、本の題名を指先でそっと触れる。」



左の画像の代替テキスト：「中村、安原、松山、京都市青少年科学センター『チョウの家』の画像を見ながら、フィールドワークの思い出を語る。」

2-5 関連プログラム

（1）ギャラリートーク

日　　時｜2023 年 10 月 14 日（土）16 ～ 17 時
会　　場｜京都国立近代美術館 4 階コレクション・ギャラリー
話 し 手｜中村裕太（作家）、安原理恵、仲村健太郎・小林加代子（Studio Kentaro Nakamura）、
　　松山沙樹（京都国立近代美術館研究員）
参 加 者｜10 名

ABCのプロジェクトメンバーとチラシ・ウェブサイトを担当したデザイナーが会場を巡りながら、今回の企画の意図や検討プロセス、そこでの議論や気づきなどを共有した。安原氏はこの日初めて中村氏が制作した触図を体験する機会となり、いくつかの触図について感想を共有しながら、制作の意図をめぐって中村氏と対話する場面もあった。

本プロジェクトは、メンバーがそれぞれの感性や専門性を生かしながらつくりあげてきた。トークでは、試行錯誤の過程や実現しなかったアイデアなどについても触れることで、プロジェクトの全体像についてより多角的に紹介する機会となった。

実施後、京都国立近代美術館公式 YouTube チャンネルにてアーカイブ動画を公開した。

YouTube「ギャラリートーク」アーカイブへのリンク

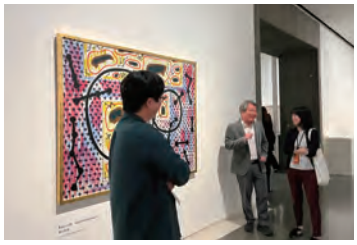
（２）トークセッション

日　　時｜2023 年 11 月 5 日（日）14 ～ 17 時
会　　場｜京都国立近代美術館 4 階コレクション・ギャラリーおよび 1 階講堂
ゲ ス ト｜広瀬浩二郎（国立民族学博物館教授）
ホ ス ト｜中村裕太、松山沙樹
参 加 者｜14 名

今回のプロジェクトでは、視覚だけによらずに抽象絵画の世界をどのように共有するか、また絵画作品の「触図」のあり方や活用についてたびたび議論を重ねてきた。今回のプロジェクトをひとつの事例として、このテーマを深掘りするため、触文化論の研究や「ユニバーサル・ミュージアム」の展示を手がける国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏をゲストに招き、トークセッションを行った。中村氏による展示説明ののち、中村氏が制作した触図を広瀬氏のナビゲートのもと、全身をつかいながら参加者と一緒に体験した。後半は会場を講堂に移し、広瀬・中村両氏と美術館スタッフの松山によるディスカッションを行った。

ディスカッションでのトピックのひとつとして、みる・さわるという２つの体験が共存する展示空間をどのように作るのかについて意見が交わされた。広瀬氏は、今回は視覚的に作品を味わう空間と触覚的な体験を楽しむ空間に分かれていたが、作品と触図とを隣り合わせにする方法もあるのではと述べた。また来場者のふるまいを「視覚モード」から「触覚モード」に転換させるため、たとえば映像・音声を効果的に使う可能性についても言及した。一方で、今回の展示構成を行った中村氏は、作品と触図を横並びにしないことで「確認的」な鑑賞経験にせず、２つの部屋を行き来して視覚・触覚の経験を統合させることで長谷川作品の印象が鑑賞者の中に徐々に立ち現れるような経験をつくることを意図していたと話した。

また広瀬氏は視覚障害のある当事者という立場からもコメントした。今回展示している触図では８の字の形の滑らかな手ざわりが印象的で、身体を動かしてさわるうちにチョウになって飛んでいるような心持ちがしたという。そして、作品鑑賞にはそうした想像力・創造力が不可欠だとしたうえで、特に見えない人が平面作品を鑑賞する際には言葉による説明や、第三者が翻案したものから感じ取るしかない。それゆえ、他の作家による《蝶の軌跡》の翻案を用意してバリエーションを持たせたり、見える人がより解説の言葉を磨いたりすることが、見えない人の鑑賞経験の深まりにつながるのではないかと、今後への期待を語った。



2-6 印刷物

■チラシ

展示にあわせ、A4サイズのチラシを４種類制作した。

ABC 三者で行ったワークショップの記録写真を掲載し、さらに展覧会の要素を触覚的にも伝える表現として、《蝶の軌跡》の８の字形を不定形な丸穴でたどったモチーフを配置した。指先でなぞった際に一筆書きの線であることが読み取れるよう、穴と穴の間隔やさわり心地について安原氏と意見を交わしながら微調整した。また前回のプロジェクトと同様、ウェブサイトの QR コードを配置し、その存在を伝えるために半円形の切り欠きを入れた。

（デザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura）、印刷：有限会社修美社）

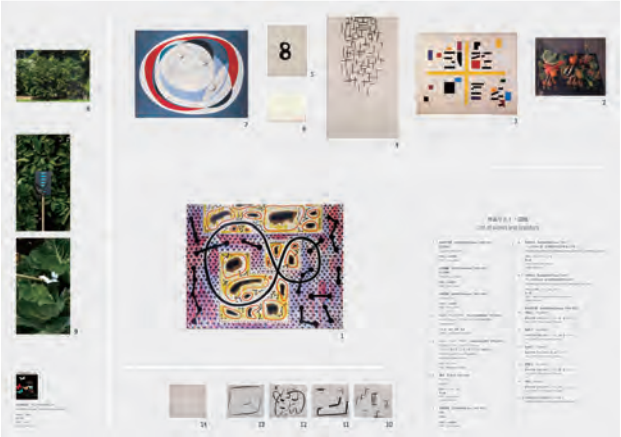
■ハンドアウト

展示を体験する人に向けたB1判のハンドアウトを作成し、展示室で無料配布したほかPDF版をウェブサイトに掲載した。また点字版の冊子も用意し、必要な方にお渡しした。

ハンドアウトには展示の意図や、《蝶の軌跡》を読み解くためのさまざまな切り口について中村氏の視点から記述したテキストと、今回の出品作品（触図を除く）の図版および作品リストを掲載した。

（デザイン：仲村健太郎（Studio Kentaro Nakamura））

ハンドアウトPDFへのリンク



2-7 他館での展覧会への協力

2022 年度に河井寛次郎をテーマとして行った ABC プロジェクト「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」を基にした展示が、愛知県の豊田市民芸館で開催された。

同館の開館 40 周年記念として、河井寛次郎の陶器や、昭和・戦後期の木彫像・木彫面、真鍮のキセル、書など、河井寛次郎記念館の所蔵作品およそ 200 点を通して、陶芸家・河井寛次郎の創作活動の全貌を紹介する展示であった。この関連企画として、日本民藝館の建物の一部（大広間と館長室）を移築して作られた豊田市民芸館第 1 民芸館に、ABC プロジェクトで作家の中村裕太氏が開発したツールが設えられた。会期中には作家とともに展示物に触れて鑑賞するワークショップも行われた。

展覧会チラシ

■展覧会情報

豊田市民芸館開館 40 周年記念・河井寛次郎記念館開館 50 年記念「河井寛次郎展 ―寛次郎の魅力は何ですか―」

関連企画「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」

会　　期｜2023 年 12 月 16 日（土）～ 2024 年 3 月 10 日（日）

会　　場｜豊田市民芸館 第 1 民芸館内

出品協力｜京都国立近代美術館

■ 概要（豊田市民芸館 HP より転載）

河井寛次郎展の関連企画として、美術家の中村裕太（1983- ）が、河井の仕事にみられる造形感覚をその暮しぶりからひも解いていく展示を行います *。河井は日本民藝館の初代館長である柳宗悦と志を同じくし、民藝運動を共に牽引しました。本展では、豊田市第一民芸館が日本民藝館の建物の一部（大広間と館長室）を移築したものであることに着目し、元館長室に河井と柳にまつわる作品や資料などを設えていきます。会期中には、河井寛次郎記念館が所蔵している作品や家具などをもとに中村が制作した造形物に触れるワークショップも開催します。

＊本展は、2022 年に京都国立近代美術館で「感覚をひらく」事業として開催された鑑賞プログラムを一部再構成するとともに、新たな視点を加えて開催します。

3. 美術館と盲学校との連携事業

3-1 狛犬ワークショップ（京都府立盲学校高等部）

■ 概要

「感覚をひらく」事業では盲学校における鑑賞教育の充実を目指し、2018 年度から盲学校との連携事業を行っている。2023 年度は 7 月に京都府立盲学校高等部と、12 月には中学部と連携した実践を行った。

7 月は、高等部の生徒たちと 2022 年度のワークショップで制作した「狛犬」を改めて鑑賞した上で、「狛犬」のおすすめポイントを考える活動を行った。作品とおすすめポイント（点字・墨字を併記）は 12 月に「CONNECT ⇄ _」事業の一環として美術館 1 階ロビーに展示した。

ワークショップ

日　　時｜2023 年 7 月 19 日（火）11 時 40 分～ 12 時 30 分
会　　場｜京都府立盲学校高等部　多目的室
参　加　者｜京都府立盲学校高等部生徒 6 名＋教員 2 名（その他、サポート・見学多数）
実施チーム｜中村裕太（作家）、松山沙樹、土山里子、吉澤あき（京都国立近代美術館）

展示

日　　時｜2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日）
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階ロビー（CONNECT ⇄ _「うずうず広場」の一角にて）

「狛犬」（左）と「CONNECT ⇄ _」での展示風景（撮影：守屋友樹）

■ 2022 年度の取り組み

2022 年 12 月、ABC プロジェクトで開発した「眼で聴き、耳で視る｜中村裕太が手さぐる河井寛次郎」のプログラムを基にした出張ワークショップを行った。参加者は高等部生徒 10 名。河井寛次郎のブロンズ作品を鑑賞したのち、寛次郎の愛用していた《脇息 狛犬》を、プロジェクトメンバーで視覚に障害のある安原理恵さんが触れて鑑賞している音声を再生し、それを聞きながら粘土による造形を行った。作品は後日、中村氏が釉薬をかけて焼成し、完成させた。

■ 2023 年度の取り組み

2023 年 7 月に、できあがった作品と共に中村氏と美術館スタッフが盲学校を再訪した。生徒たちと「久しぶり」と声をかけ合うところから活動はスタートした。

ワークショップの様子。前回と同じく畳の上で円座になった

円座になり、まずは前回のワークショップを思い出しながら、10 個の作品を順番に鑑賞していった。自分が仕上げた作品に再会して嬉しそうな表情を浮かべる生徒もいれば、「狛犬」という共通のお題から全く違う表現が生まれることを面白がる反応もあった。

続いて、これらを美術館ロビーで展示する予定であることを伝え、鑑賞のヒントになるような「おすすめポイント」を考える活動を行った。一人一作品を担当し、形やさわり心地の特徴、さわったときの印象、鑑賞する人に伝えたいメッセージなどを考え、口頭で発表してもらった。

この日は円座に座っていたこともあり、一人が思いついたことをぽろっと発言するとそれに対して他の生徒がすぐ反応するなど、終始リラックスした雰囲気で活動が進んでいった。また、「ずっしり重みがある」「つるつるしている」「指が入るくらいの穴がある」といった客観的な情報だけでなく、自分が小さくなってその狛犬に乗ったところを想像したり、「穴のところには調味料を入れられそう」と用途を考えてみたりと、自分なりに自由に発想を膨らませていたことが印象に残った。

ここでの生徒たちのコメントを記録し、それをもとに後日タイトルとテキストからなる作品のキャプションを制作した。

主な作品とキャプション

「操縦可能な狛犬」

デパートの屋上にある子ども向けの乗り物のように感じました。定員は一名、２つの耳が操縦用の持ち手になっていて、座席はリクライニング機能付き。後ろ側にも顔のようなものがあり、バックすることも可能です。スーパーの方には、これを真似た乗り物を是非とも作ってもらいたいです。(TK)

「前足にしたかったのかな、顔にしたかったのかな」

不思議な形の狛犬で、特に背中のでこぼこが特徴的です。誤ってローラーに入って潰されかけているのかも。前足は作ろうとしたけどできなかったのかな。顔も、顔にしたかったけれどできなかったような、そんなふうに感じます。(TY)

「足を収納できる賢い犬」

この狛犬は、目が真ん丸で口を大きく開けているので、何かびっくりすることがあったのかなという想像が膨らみました。背中の穴には後ろ脚を片方収納することができ、３本脚でもしっかり立つことができるのもポイントです。(NA)

「暑くて垂れてしまった狛犬」

耳、目、口、そして鼻になりたかったものから顔が出来ています。少し垂れたような表情で「暑いなあ、だるいなあ」と思っているのかも。背中の蓋を開けたところには飴玉や１円玉が入りそうで、貯金箱や灰皿としても使えそうです。背中の内側の感触は、新幹線のトンネルのようにも感じられます。(ID)

3-2 鑑賞・制作ワークショップ（京都府立盲学校中学部）

■ 概要

2023 年 12 月に京都府立盲学校中学部の生徒たちとのワークショップを実施した。盲学校との連携事業では、時期・対象者・活動内容について盲学校側の要望を踏まえながら検討している。今回は中学部の生徒たちを対象に、美術館に来館して活動したいとのリクエストがあり、10 月頃から具体的な検討を進めていった。

当日は、開催中の２つの展示（CONNECT ⇄ _1 階ロビー「うずうず広場」、および 4 階のエデュケーショナル・スタディズ 04「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」）を活用した鑑賞・制作プログラムを行った。

日　　時｜2023 年 12 月 12 日（火）9 時 40 分～ 11 時 50 分
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階ロビー、4 階コレクション・ギャラリー
参　加　者｜中学生 5 名（弱視）、引率教員 7 名
ファシリテーター｜松山沙樹、渡川智子（京都国立近代美術館）、和田史（京都府立盲学校）
運営スタッフ｜牧口千夏、渡辺亜由美（京都国立近代美術館）

■実施報告

導入

まずは美術館の空間に慣れ、意見をリラックスして言えるような雰囲気づくりのための導入を行った。予定ではまず 1 階ロビー奥に向かい、高等部の生徒たちが制作した「狛犬」の前で自己紹介などを行う流れを想定していた。しかしロビー空間にはほかにも展示物があり（CONNECT ⇄ _ 展示作品、p.38 参照）、生徒たちはそれらにも興味を示していた。そこで予定を変更し、それぞれの展示について簡単に解説しながらゆっくり奥まで進んでいった。結果的に、美術館スタッフにとっても生徒たちの性格や興味、関係性などを把握できる有意義な時間となった。

ウォーミングアップ：「狛犬」の鑑賞など

続いて「狛犬」の展示エリアへ。ここでは 10 個の作品を手で触れて、形や質感、重さなどを味わうとともに、感じた印象などを自由に話す活動を行った。各作品にはおすすめポイントが添えられているが、第一印象を大事にしてもらえるよう、紙を貼って隠しておいた。

途中で、ある 1 つの作品のおすすめポイントをスタッフが読み上げ、どの作品を指しているかを当てるゲームも行った。読み上げたのは「操縦可能な狛犬」。生徒たちは “ 中に人が乗って操縦することができる ”、“ 短いがしっかりした足がある ” など、フレーズを手がかりにしながら活発に意見交換し、形を改めて確かめながら推理していった。知っている先輩が作ったものだということも、作品に興味を持つきっかけになったようだった。

活動１：抽象的な「かたち」を味わう

その後は４階に移動し、展示「チョウの軌跡――長谷川三郎のイリュージョン」を活用した鑑賞・制作活動を行った（展示の概要は p.11 参照）。

鑑賞対象としたのは、作家の中村裕太氏が粘土やキャンバス等を用いて制作した「触図」（全 14 点）である。これらは抽象的な形を組み合わせて構成され、何らかの具体的なモチーフが表現されているわけではない。じっくりさわることで一つ一つの形を確かめることはできるだろう。しかし今回はもう少し踏み込んで、それらの形から自由にイメージを膨らませたり物語を考えたりするような活動にまで深めたいと思い、３つのステップを設けた。

まずは準備運動として、厚紙や紐、スチレンボードなどで作ったさまざまな形に触れることから始めた。これらは、中村氏の触図から特徴ある形を抜き出して事前にスタッフが準備したもので、いずれも手のひらサイズくらいに縮小した。まずはそれらを皆でさわって確かめ、スタッフが「今の気持ちにぴったりな形はある？」「ワクワクする形や迷っている形はどれ？」など問いかけながら、形からイメージを膨らませたり、感情と結びつけながら考えてみる活動を行った。驚いたことに、こちらの想像以上に、自由な発想を膨らませて意見を述べてくれた。

普段は学校と家の行き来（直線部分）だが、今日は美術館で新しい経験をする（渦巻き状の部分）

活動２：「触図」の鑑賞

つづいて展示室に移動し、２名と３名に分かれてスタッフと共に触図を鑑賞した。触図は全部で 14 点あるが、今回はチョウの動いた跡がテーマになった２点（触図１と８）に絞って、主に手で触れながら鑑賞をすすめた。

さわり始めてわりと早い段階で、活動１でさわったものと似た形が登場していることや素材やサイズが違うことに気づいた生徒もいた。形のバリエーションや配置が概ね把握できると、そこから感じた印象やイメージしたことなどを口々に話し始めた。

触図１については、「豪華な邸宅の敷地を表しているみたい」「失ってしまった記憶のかけらを懸命に集めようとしているところ」「世界の内と外が対比されている」「世界を飛び回っている動きと、内にこもっている動きがある」などといった意見が出た。

触図８については、「異なる形の動きは、それぞれ、型をやぶって動ける人と、昔ながらの様式を守る人の対比になっている」「1 番の作品の点線に比べて途切れている箇所が多いから、その分、外部からの干渉や葛藤が多いのでは」といった意見が出た。

触図１：長谷川三郎《蝶の軌跡》をテーマにした触図を鑑賞する様子

触図８：中村裕太《チョウの飛ぶ道｜京都府伏見区深草池ノ内町》をテーマにした触図を鑑賞する様子

また鑑賞の中で、「なるほど……」「それを聞いて思ったんだけど」など、他の人の発言に耳を傾けて、自分の中の考えも柔軟に変化させながら対話を続けていく様子が印象的だった。ここまでの活動を通して、作品の感じ方に正解はないことや、同じ形からも人によって多様な解釈が生まれるということを、体験を通して感じ取っていたのではないだろうか。

活動３：「〇〇なチョウの軌跡」を作ろう

触図にふれて対話する中で生徒たちは、制作者の意図について、いずれもチョウの動いた跡をテーマにしていることを共有していた。そこでワークショップの最後に、今度は自分たちなりの「チョウの軌跡」を考えて形にしてみる活動を行った。再びチームに分かれて、「嬉しいときのチョウ」「うきうきしているチョウ」など、チョウの気持ちや様子を想像し、B1 サイズの紙に、すでに用意されたパーツや、自由にちぎったり組み合わせたりした形を貼り付けて制作を進めていった。

活動３の様子。形を自由に組み合わせて貼り付ける

グループ１：「チョウの一生」

生まれてから死ぬまでのチョウの一生を人間の一生に重ね合わせて、紙の端からぐるりと楕円のかたちを巡るように表現した。作品鑑賞時から生徒たちのなかでは、点線や半円状のそれぞれの形に、自由に動いている・外部から閉じこもっているなど、具体的なイメージが付与されており、制作時においてもそのイメージに基づき、形が組み合わされた。

グループ２：「夢中になって飛んでいるチョウの軌跡」

日々、嬉しいこと・悲しいことが起きて感情が揺さぶられることが多いが、このチョウはそうした外の世界を気にせず、自分の世界で夢中になって飛んでいる。外と内の境界を紐で表して、内側ではチョウが気持ちよく自由に飛び回る軌跡を表現した。さわる人が軌跡を自由に解釈できるように、あえてランダムにパーツを配置した部分もある。

今回のワークショップは、「知る・確かめること」から始め、「味わう・想像すること」、そして「つくること・表現すること」へとステップを踏んで進めていった。美術館への来館経験がなく、作品に手で触れて対話するという活動が初めての生徒もいたようだが、後半になると、抽象的な形から感情の動きや複雑な状況などをイメージしながら鑑賞が進み、体験の深まりが感じられた。

また引率教員のフィードバックの中に「日頃言葉数の少ない生徒からも想像したこと、感じたこと等の発言があ」ったというコメントは、重要な指摘と言えるだろう。すなわち、美術を通した活動や学校とは異なる空間で過ごすことによって、生徒たちの感性が刺激されたり、新たな興味関心の扉が開かれたりする可能性があることが示唆されている。

盲学校における鑑賞教育の実践はいまだ発展途上である。今後も、対象者の発達段階や障害の程度や作品、場所の特徴にあわせ、活動内容を検討しながら連携事業を重ねていきたい。加えて毎回の活動がユニークなものになるからこそ、活動の内容や生徒たちの様子を広く発信していくことも鑑賞教育の一層の充実・発展のためには重要と考える。

主な感想・フィードバック

〈生徒の感想より〉

・普段、作品は視覚で作品を鑑賞するので、触って作品の良さを感じることの大切さを学びました。また、後半の作品作りではさまざまな形を使って表現する楽しさや難しさを学びました。本当にありがとうございました。

・いつもは踏み入れない世界に踏み入れて楽しかった。立体で表現するのはあまり聞いた事がなかったのでとても面白かった。職員の方々も優しく接してくれて説明がわかりやすかった。

・僕がとても印象に残っていたのがチームに分かれて一つの作品を作る（こと）です。僕たちのチームでは「人生」をテーマにしてつくっていきました。自分でも「どんなものができるんだろう」と思っていましたが、とても良い作品ができました。蝶々もお花畑にいるだけの生き物ではなく人間のようにときには辛い人生を送るんだということが僕たちのチームの作品でわかります。この美術館でのワークショップはとても楽しかったです。また、この京都国立近代美術館に行って鑑賞したいです。

・いろいろな作品にふれることができ、新たな視点が広がった。人によって物の見方やとらえ方が違うことが分かった。

・凸凹のあるもので手の感覚も使い、どんなことを理由に描かれたのかを予想することが楽しかったです。美術館のイメージが目でしか楽しめないと思っていたので楽しかったです。

〈教員からのフィードバック〉

・鑑賞（インプット）から制作（アウトプット）と とても良い流れだった。

・最初は緊張感がある様子だったが、徐々に気持ちがほぐれ、さまざまな想像力をかきたて対話をしながら、鑑賞や制作を楽しめていたようだった。

・抽象的な形に、自分の感情や創作ストーリーを自分なりにつけたり、また友だちの言葉をきいて、そこから発展させる姿に、「こんな一面もあるのか！」とおどろきました。

・日常と異なる環境で、リラックスしながら取り組めたことが何より良かった。

・前年度から今年度にかけて高等部で取り組んだ活動と連動しており、継続することの意義を感じた。

・鑑賞する前に、触察作品に出てくる様々な形を触察してイメージを膨らませることで、触察作品や共同制作の興味関心を引き出すことができたのがとてもよかった。

・往復に時間はかかるが、1 年に一度は美術館に足を運び、特別な空間で活動することは、視覚に障害のある生徒にとって、意味があると思う。

・普段、自分では来ない場所に学校で来て、こういう所もあるよ、こういう楽しみ方もあるよというのを生徒に体験させる、という意味でも美術館に行って、ワークショップを受けるというのは良かったと思います。

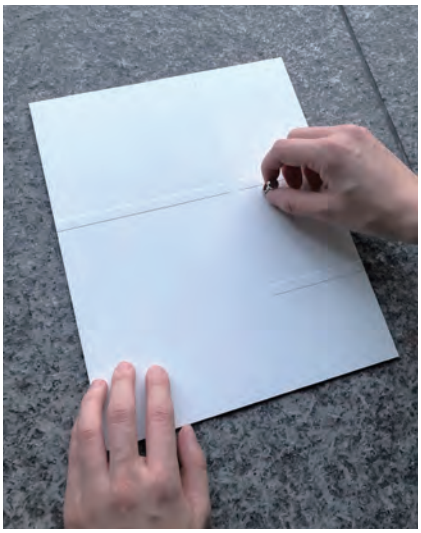
4. さわるコレクション

4-1 概要

「感覚をひらく」事業では、京都国立近代美術館所蔵のコレクションを触図とテキストによって紹介する触察ツール「さわるコレクション」を継続的に制作している。美術館の所蔵作品をより多くの方々に知っていただくこと、特に視覚に障害のある方に向けて、手で触れながら所蔵作品を身近に感じていただくことを目指している。1 作品につき各 1,000 部制作し、全国の盲学校やライトハウス、点字図書館等への配布を行っており、個人・団体問わず希望に応じて美術館から随時送付も行っている。

「さわるコレクション」の制作においては、実施メンバーやプロセス、表現方法を固定化せず、常に新たな課題意識のもと取り組むようにしている。2022 ～ 23 年度の 2 年間は、京都市立芸術大学で「さわる名画」の実践的研究に取り組む辰巳明久教授と同学で非常勤講師を務めるグラフィックデザイナーの桑田知明氏（Kuwa.Kusu）、そして国立民族学博物館の広瀬浩二郎教授と協働した。そして、絵画を構成する「輪郭線」と「色合い」を触覚情報としていかに伝えるかを課題として制作に取り組んだ。これらの表現が対照的な作品として、明瞭な直線と色彩から構成されたピエト・モンドリアン《コンポジション》（1929 年）と、全体的にグラデーションのある色面で、モチーフと背景との境界線が曖昧に描かれている徳岡神泉《池》（1952 年）を選定した。

〈プロジェクトメンバー〉
デ ザ イ ン：桑田知明（Kuwa.Kusu）
制 作 助 言：辰巳明久（京都市立芸術大学）、広瀬浩二郎（国立民族学博物館）、京都府立盲学校教員有志［モンドリアン作品の検証］
美術館チーム：松山沙樹、渡川智子、牧口千夏（京都国立近代美術館）



4-2 構成

さわるコレクションは「触察シート」「解説文」と、それらを収める「ポケットファイル」からなる。触察シートの制作にあたっては、作品の特徴に応じて印刷加工方法をそのつど検討してきた。今回はモンドリアンと徳岡神泉の作品の表現方法の違いを味わうことも目的としたため、「エンボス面」と「磁石面」の二層を貼り合わせて構成する、という共通の仕様を設定した。エンボス面には、作品の構図やモチーフの輪郭をエンボス加工で表している。その下の磁石面は、台紙の上に作品の構図にあわせて磁力の異なるマグネット片や厚紙を手作業で貼り合わせている。

触察の流れとして、まずはエンボス面をさわって構図やモチーフの形を味わってもらう。続いて付属の強力磁石を触察シート上で動かしながら、エンボス面の下に隠された磁力を感じ、色合いの違いや濃淡を味わってもらいたいと考えた。なお、磁力から色の違いや濃淡を想像できるよう、シートにはあえて色を付けていない。

解説文では、作家の紹介や色彩など、図だけでは表せない情報を点字で紹介した。またポケットファイルの表面には作品画像をカラー印刷し、裏面に解説文に加えてシートの加工方法についても墨字で掲載している。

加工方法について

No.11　ピエト・モンドリアン《コンポジション》

明瞭な直線と色面によって構成された画面が特徴的な作品である。エンボス面は強めにエンボス加工を施し、はっきりとした線であることを表した。磁石面においては、黒・青・黄・白の４色を磁力の異なる３種類のマグネットシートと厚紙に置き換え、磁力の違いで色の濃淡の違いを伝えることを目指した。磁石の仕様決定にあたっては専門業者の協力を得て、厚みの異なる等方性磁石と異方性磁石を用いている。

なお今回は、黒→青→黄→白の順に磁力の強弱を設定したが、色から受ける印象は人それぞれであり、視覚経験の有無によっても色のイメージは異なる。そのため解説文には色と磁力の対応関係については言及せず、磁力や触感の違いから作品について自由に想像をふくらませてもらえるようにと考えた。

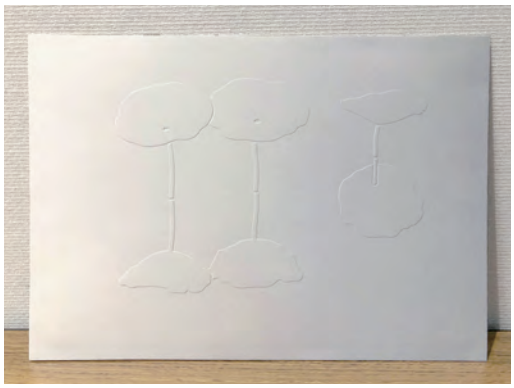
（マグネット加工：ディ・エス・シィ株式会社、厚紙加工：常盤印刷紙工株式会社、エンボス加工：有限会社修美社）

エンボス面

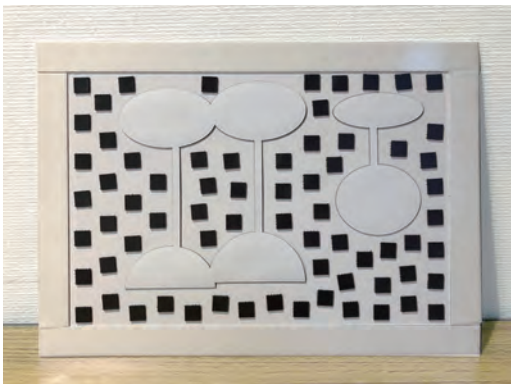
磁石面

No.12　徳岡神泉《池》

本作は、池と蓮の境界線が曖昧で、さまざまな緑色を用いて描かれた背景が特徴的である。作品のこうした表現をふまえ、エンボス面には、蓮の形をやや弱めのエンボス加工で表している。磁石面については、中央に蓮の形をしたマグネットを配置し、その周囲に約 10mm 角のマグネット片を 1 シートあたり約 70 枚、手作業で貼り付けている。さまざまな緑色を混ぜて描かれた背景の雰囲気を、磁石がところどころ引っ張られるような触感によって表現することを目指している。
（マグネット加工：マグネット本舗クルピタ、エンボス加工：株式会社羽車）



エンボス面



磁石面

4-3 検討プロセス

2022 年 10 ～ 11 月　打ち合わせ（方針検討、作品選定等）

これまでの触察シートの加工方法を踏まえた上で、今回は、磁力による表現を追求することとした。その後作品を選定し、桑田氏による試作制作がスタートした。

2023 年 2 月　試作品についての意見交換

試作品の第一版をさわって検証した。磁石による表現の可能性を感じつつも、色の濃淡を磁力に翻案することの難しさや、シートをさわるための強力磁石の仕様についても可能性を話し合った。ここでの意見を踏まえ、桑田氏が試作品第二版の制作を進めた。

2023 年 5 月　作品実見

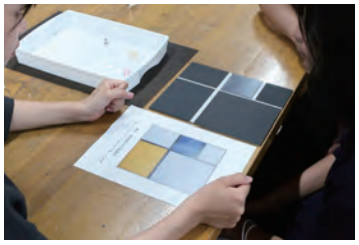
美術館にてモンドリアンと徳岡神泉の作品を実見し、特に徳岡神泉《池》は複雑な色合いや、蓮と池の境目が分からないような描かれ方が特徴的であることを確認した。そして、視覚情報から受けるそうした印象を触覚情報にどう翻案するのか、引き続き検討することを共有した。

2023 年 6 月　打ち合わせ（スケジュール確認等）

今年度の助成の採択通知を受け、進行スケジュールを再検討した。また学校現場における具体的な活用方法も想定すべく、京都府立盲学校の先生方との意見交換を行うこととした。

2023 年 8 月 19 日　ライトオンデザイン・プロジェクト「絵をさわってみよう！　くっつけてみよう！」ワークショップでの意見聴取

大阪教育大学にて、視覚障害のあるお子さんと家族を対象としたワークショップが開催され、桑田氏が制作したモンドリアンの触察シートのサンプルを鑑賞していただく機会を得た。視覚障害のある方が 6 名参加され、サンプルで表現した 3 段階の磁力の違いについては概ね判別可能であることが確認された。また、色の触覚情報への変換に向けた検討材料として、黒・青・黄・白の 4 色を触感の異なる素材を用いて表現してもらう制作活動も行った。しかし今回の実施では表現の一貫性を見出すことは難しく、色から広がるイメージや触覚情報への翻案方法は各人の感性や経験に応じて多様ではないかという考えを持つに至った。（協力：大阪教育大学特別支援教育部門）



2023 年 9 月 7 日　京都府立盲学校でのモニター調査

盲学校の教員ら 5 名の方々に、モンドリアンの触察シートやシートをさわるための磁石のサンプルをさわっていただき意見を聴取した。磁力の強さや、引っ張る力・反発する力のどちらが良いか、また触察シートをさわるための磁石の形状について、つまみ型のものや指サックの形をしたものなどを試してもらい、フィードバックを得た。

2023 年 9 ～ 10 月　磁石の仕様検討、その他材料の選定

この時期からは、1,000 部という大量製作を見据えながら素材選びを進めた。モンドリアンの触察シートに用いる磁石について、専門業者の助言を得て仕様を確定した。また触察シートに貼り付けるパーツや、触察シートを体験するために用いる磁石なども、予算内で最適な素材を桑田氏と美術館とで慎重に検討を重ねて選定していった。

2023 年 12 月　企画メンバーでの打ち合わせ

材料調達の現状共有と、サンプルの確認作業を行った。また再検討の結果､触察シートは「エンボス面」（作品の構図やモチーフの形をエンボス加工で表した用紙）と「磁石面」（マグネットや厚紙を貼り合わせたシート）の二層を貼り合わせる構造とすることになった。解説文については美術館で叩き台を作成し、プロジェクトメンバーでやり取りを重ねて最終版とした。

2024 年 1 ～ 2 月　仕様の最終確定

最終的に選定した素材を用いて最終版のサンプルを組み立てて、さわって検証を行った。あわせて、触察シートを体験するための磁石の選定と付属方法も話し合った。

2024 年 2 ～ 3 月　組み立て作業と発送

台紙に磁石や厚紙等のパーツを貼り付けて触察シートを組み立て、解説文のシート（点字印刷）とともにポケットファイルに収納していく作業を行った。３月以降、発送を進めていく。

5. CONNECT ⇄ _ アートでうずうず つながる世界

文化庁による「令和 5 年度 文化施設の連携による共生社会推進事業」として、京都市の岡崎公園一帯の文化施設が連携し、アートを通して多様性や共生社会のありかたについて共に考え、語り合い、実践するプロジェクト「CONNECT ⇄ _（コネクト）アートでうずうず つながる世界」が、2023 年 12 月に開催された（主催：文化庁、京都新聞）。京都国立近代美術館は協力施設のひとつとして参加し、1 階ロビーに体験・くつろぎ・展示スペースとしての「うずうず広場」を設え、会期中の参加型イベントとして「筆談鑑賞会 かく⇄みる⇄つながる」を企画・実施した。

デザイン：坂田佐武郎（Neki inc.）

■開催趣旨

文化庁・京都新聞では、アートを通して多様性や共生社会のありかたについて、障害のある方もない方も共に考え、語り合い、実践するプロジェクト「CONNECT ⇄ _（コネクト）アートでうずうず つながる世界」を、2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日）の期間に開催します。京都の文化ゾーンである岡崎地域の美術館、図書館、劇場、動物園、展示会場などの文化施設が連携して、障害や属性に関わらず様々な方が気軽に文化・芸術にアクセスできるプロジェクトを行います。

4 回目となる 2023 年度のテーマは「アートでうずうず つながる世界」。さまざまな表現や人々に出会い、一緒にアートをつくったり楽しんだりすることで、心もからだも「うずうず」動き出したくなる、そんな体験をしてみませんか。（CONNECT ⇄ _ ウェブサイトより）

5-1 開催概要

2023 年度 CONNECT ⇄ _ アートでうずうず つながる世界
（令和 5 年度文化庁委託事業「文化施設の連携による共生社会推進事業」）

日　　程｜2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日）　　参 加 費 ｜無料
会　　場｜京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、京都府立図書館、ロームシアター京都、京都市動物園、京都市勧業館「みやこめっせ」
主　　催｜文化庁、京都新聞
共　　催｜京都府、京都市、京都国立近代美術館、京都市京セラ美術館、京都府立図書館、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都市動物園
後　　援｜NHK 京都放送局、KBS 京都、エフエム京都
協　　力｜京都障害者芸術祭実行委員会、きょうと障害者文化芸術推進機構、京都市勧業館「みやこめっせ」、京都伝統産業ミュージアム、日図デザイン博物館、社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会

5-2 うずうず広場

■開催概要

日　　時｜2023 年 12 月 1 日（金）～ 17 日（日）
会　　場｜京都国立近代美術館 1 階ロビー
（京都市京セラ美術館本館 2 階談話室にて、サテライト展示として過去のアーカイブ映像を上映）
展 示 協 力｜art space co-jin、京都府立盲学校、井口直人／社会福祉法人さふらん会 さふらん生活園、酒井美穂子／社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房、生活介護事業所 ぬかつくるとこ
空間デザイン｜REUNION STUDIO
会 場 撮 影｜守屋友樹、山﨑晃治

会期中、美術館 1 階ロビーを「CONNECT ⇄ _」めぐりの拠点、そして展示・体験・くつろぎスペースとして設えた。障害のある方の日々の営みや表現にふれる場として、生活介護事業所「ぬかつくるとこ」によるナントナティックウェイトリフティングや、井口直人さん（さふらん生活園）、酒井美穂子さん（やまなみ工房）、京都府立盲学校生徒（p.23 ～ 25 を参照）による作品を紹介した。来場者もそうした表現に気軽に参加・体験できるよう、体験用のツールを設置し、手で触れたり身体で味わったりできる展示を行った。

［以下、会場撮影すべて：守屋友樹］

ナントナティックウェイトリフティング

岡山県にある生活介護事業所「ぬか つくるとこ」の行事から始まった「競技」。ただ単純に「軽いバーベルを重そうに持ち上げる」。パントマイムとも、演劇ともとれるこの競技は、点数をつけ勝ち負けを決めるものではない。やってもやらなくてもいいこの行為によって、日頃くすぐられることのないエキサイティングな感覚、くだらなくも愛おしい可笑しな感覚が呼び起こされる。

酒井 美穂子さん

1979 年生まれ、滋賀県在住。17 歳から今にいたる 20 年以上もの間、朝起きて、夜眠りに就くまでのほとんどの時間を『サッポロ一番しょうゆ味』を手放さずに過ごしている。彼女はそれを食べる事はなく、ただ親指で擦り音を立て見つめるだけだが、大好きなその行為を貫き通している。1996 年から「やまなみ工房」に所属。

井口 直人さん

1971 年三重県生まれ、愛知県在住。行きつけのコンビニや通所する「さふらん生活園」のコピー機を使い、自分の顔とその時々の気に入ったものを写し取ることを日課としている。センサーの光の動きと共に身体を動かすことで、画面に独特の歪みが生まれており、その活動は試行錯誤を繰り返しながら 20 年ほど続いている。

京都府立盲学校のみなさんによる作品

京都国立近代美術館では、「みる」ことを中心としてきた美術鑑賞のあり方を問い直し、「さわる」「きく」などの方法で誰もが楽しめるユニバーサルな鑑賞プログラムを考える「感覚をひらく」事業を行っている。この事業の一環として、作家の中村裕太さんと共に京都府立盲学校高等部で実施した出張ワークショップにおいて共同制作された「狛犬」の作品を紹介する。

5-3 筆談鑑賞会　かく⇄みる⇄つながる

■概要

「かく」ことでアートを鑑賞してみませんか。このプログラムでは、作品をじっくり見て感じた印象や浮かんだ疑問を、文字や絵をかくことで伝え合います。新しい視点や感じ方にふれることで、どんな新しい気づきがあるでしょう。聞こえる人と聞こえない／聞こえにくい人が一緒に楽しめるプログラムです。（CONNECT ⇄ _ ウェブサイトより）

日　　時｜2023 年 12 月 10 日（日）① 10 時 30 分～ 12 時 30 分　② 14 時 30 分～ 16 時 30 分
会　　場｜京都国立近代美術館
参 加 者｜① 13 名（うち聴覚障害あり 6 名）、② 15 名（うち聴覚障害あり 5 名）
ファシリテーター｜小笠原新也（耳の聞こえない鑑賞案内人）、徳江サダシ（アートトラベラー）
協　　力｜社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会
撮　　影｜衣笠名津美

■実施報告

聞こえる・聞こえないに関わらず、文字や絵を「かく」ことで作品についての発見や疑問を共有し、対話を深める筆談鑑賞会を、昨年度に引き続き実施した。

ファシリテーターに昨年同様に小笠原新也氏を迎えたほか、京都在住のろう者でアートトラベラーの徳江サダシ氏の協力も得た。さらに社会福祉法人京都聴覚言語障害者福祉協会とも連携し、事前打ち合わせから当日の運営・手話通訳まで一貫して協力いただいたほか、京都地域での聴覚に障害のある方への広報周知についても協力を得た。

事前に 3 回の打ち合わせを行った。まずは小笠原氏が各地で実践する筆談鑑賞の趣旨や成果を紹介いただき、筆談鑑賞の意義やポイントを確認。そのうえで今回の対象者・定員・時間帯・対象作品について検討を進めた。鑑賞作品については、当日に実物が展示されている作品から選定することとし、ファシリテーターと美術館スタッフが実見のうえ、堂本印象《新聞》と長谷川三郎《蝶の軌跡》に決定した。11 月初旬から参加者募集を開始。合計 39 名の応募があったため各回 12 名程度から 15 名まで定員を引き上げ、可能な限り希望を受け入れた。聴覚に障害のある方は 11 名参加され、前回の実施（22 名中 3 名）と比べて参加率は上がった。

〈当日の主な流れ〉

①自己紹介

円座になり、ファシリテーター、参加者の順に自己紹介を行った。

②導入・ルール説明

スライドを使いながら、徳江氏が一日の活動の流れを説明し、小笠原氏が筆談鑑賞の方法やポイント（「同時に書いても良い」「作品に描かれたものを根拠に書いてみよう」「声を出すのはだめだけど、笑い声はOK」など）を紹介した。

なお、小学校低学年の参加者や発達障害のある参加者には、開始までの待ち時間に、スライドの内容をわかりやすい日本語で説明する資料を手渡し、ファシリテーターが個別に説明を行った。

③鑑賞１　堂本印象《新聞》

ここからは２グループに分かれて同じ作品を鑑賞した。一人１本ずつ違う色のペンを持ち、作品画像を中央に貼った模造紙の上に、作品から感じたことや疑問に思ったことなどを自由に書き込んでいく。また作品の細部や色合いをよりしっかり鑑賞できるよう、会場前方に大型モニターを設置して作品画像を大きく投影した。

各グループにファシリテーターが１名入り、模造紙全体を見渡しながら、同じような意見を線でつなげたり、鑑賞や対話がより深まるような問いかけを書いたりしながら一緒に鑑賞をしていった。

１作品目は、日本画家の堂本印象が1950（昭和25）年に描いた《新聞》。人物や風景など具象的なモチーフが描かれ、人物の表情や仕草から心情を想像したり、絵の中で起きている物語や時代背景を考えたりしやすいのではということで選定した。

「この人は漁師？」「不思議な帽子のつまみ方」「これはリンゴ箱？」など、まずは各自が気になったモチーフから書き込みが始まった。そして時間が経つにつれ、より観察が深まったり他の人の言葉を参考にしたりすることで、「一見女性のようだが、魚を持つ手が筋肉質なので男性では」や、前景に大きく描かれた２人の人物が「お母さんと娘ではないか」「目つきが鋭いのでスパイではないか」などの解釈も広がっていった。筆談鑑賞は約20分間行い、鑑賞後に５分間、互いの模造紙を見ながら振り返る時間を設けた。

④鑑賞２　長谷川三郎《蝶の軌跡》

後半はメンバーを入れ替え、洋画家の長谷川三郎が1937（昭和12）年に描いた《蝶の軌跡》を鑑賞した。こちらは幾何学的な模様や不定形な形によって構成された抽象絵画である。筆談鑑賞ではタイトルや作者名などの情報を伝えないため、あくまでも描かれたもの、そしてそこから感じた印象や疑問などを手掛かりに鑑賞を始めていくことになる。１作品目との違いに戸惑う人が多

いかと思われたが、考え込む様子はあまり見られず、中には絵を見た瞬間に書き込み始める人もいた。「甲骨文字のよう」「古墳っぽい」「細胞みたい」などの見立てが生まれたり、「こういうつぎはぎのあるズボンをはいていました」「ソースのかかったハンバーグみたい。ちなみにデミグラスソース派」など、個人的な経験や好みなどを交えた書き込みも目立った。抽象作品ということで「このように解釈しなければ」という考えにとらわれすぎず、自由な発想が生まれやすかったのかもしれない。

鑑賞後に模造紙を眺める際は、同じ作品でもグループによって全く異なる書き込みや解釈、ストーリーが展開していることに驚いたり、「わかるわかる」というように頷き合うしぐさが見られた。聞こえない人と聞こえる人が、ジェスチャーや表情などでコミュニケーションを取ろうとする様子もあった。

⑤実際の作品を鑑賞

その後、４階の展示室へ移動して実際の作品を鑑賞した。ここで初めて美術館スタッフが、タイトル、作者、制作年や時代背景について簡単に紹介した。参加者からは、「《蝶の軌跡》の＋模様は黒色と思っていたが、実物を見て青味がかった色だと初めて分かった」「遠景にも人物の姿が描き込まれていることが発見できた」などの感想があった。モニター越しに見るのと比べて、色合い、筆致、実際の大きさなど、実際の作品からはより多くの情報が得られ、作品への関心がさらに高まった人もいたようだった。

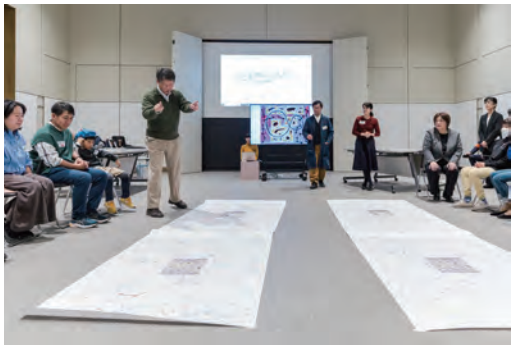
⑥ふりかえり

最後は講堂に戻り、模造紙を囲んで座って一日の体験を振り返った。参加者の発言は美術館スタッフが要約筆記を行い、会場前方のスクリーンに投影しながら進行した。

まずはファシリテーターの小笠原氏・徳江氏がコメントを述べた。《新聞》については、表情、しぐさ、場所、持っているものなどを手掛かりに人物の関係性を推理したり絵の中で起きている出来事などを想像したりする内容の書き込みが多かったこと。それに対して《蝶の軌跡》は抽象絵画ということもあり、より自由な発想が目立ったこと。さらに、８の字の形や不定形な形などを模したイラストや、他者の発言から引っ張った線などがあふれ、模造紙自体が一つの抽象絵画のようにも見えてきたという言及もあった。

参加者からは、自分とは異なる解釈に出会えたことに驚きや喜びを感じたという感想が複数あった。たとえば《蝶の軌跡》について、「自分は宇宙のようだと思ったが、細胞のようだという感想

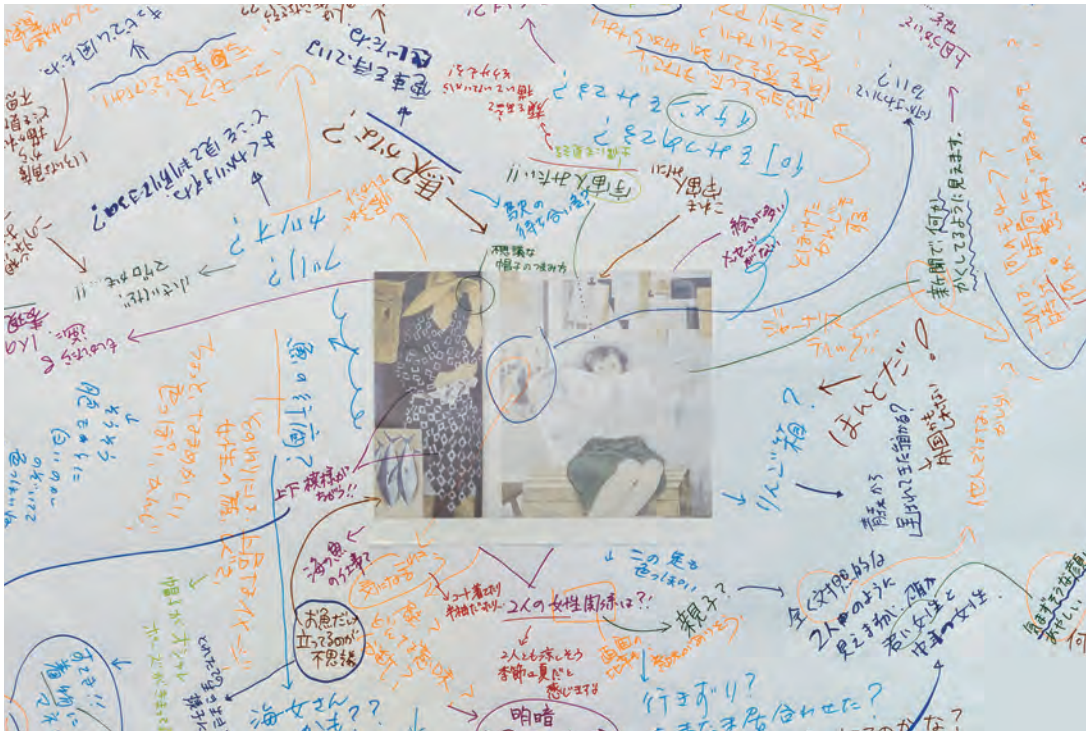
を持つ人もいたことに驚いた。大きい世界に感じる人もいれば、小さい世界に感じる人もいるんだ」や、「自分は地図のように見えていたが、“しみ抜きみたい”という書き込みがあって、面白かった」といったコメントがあった。



また筆談という鑑賞方法自体に対しての感想として、「作品についてではなく、コメントに対してコメントを返すことが楽しかった」や「初対面の人と話す時は勇気がいるが、一緒に書く場合はその抵抗が低くなるように感じ、安心してコミュニケーションできた」といった発言があった。あるろう者の方は過去の経験について触れながら、「複数の聴者とコミュニケーションを取る時に声と筆談を併用したことがあるが、声でのやり取りがメインで、筆談は時間がかかるのでタイミングが遅れて悔しい思いをしたこともあった。今回は全員が筆談なので、みなさんの発言を同時に見ることができた」とも話された。

今回は聞こえる人も聞こえない人も、小学生から 70 代まで年齢も様々な参加者が、絵を囲んで共に筆談でつながる機会となった。時間の経過とともに模造紙の上に言葉やイラストがじわじわとあふれ、話題が行き来したり円環したりしてゆっくり深まっていったことが印象的だった。参加者から、初対面でも気兼ねなく自分の思いを書き込めたという感想があり、これは筆談鑑賞の大きな特徴のひとつと言えるだろう。その理由として、今回の筆談鑑賞では、考えるペースや書き込むペース、作品を見ることと書くことのバランスが参加者の自主性に委ねられ、誰かのコメントに対して誰がどうリアクションするかも自分たちで決めて良かった、という点が挙げられるだろう。「書く」という手法は共通であったが、参加者の自主性が担保され、各自が自分の居心地の良いスタイルを探りながら参加できるような場となっていたことがユニークだったのではないだろうか。

他方で、モニターに投影した画像で鑑賞を進めることや、情報保障（手話・文字通訳）をどの活動にどの程度入れるのかなど、実施内容や運営方法の課題や検討の余地も新たに見つかった。引き続き、ファシリテーターや参加者と意見交換を重ねながら筆談鑑賞を実践し、さまざまな人が気兼ねなく参加できるユニバーサルなプログラムとして育てていくことができればと思う。



主な感想

- 美術館に行くと見ず知らずの人に対して、この人はどんな気持ちでこの絵を見ているのかな、と思うことが良くあるのですが、今日、そんなはじめて会う人の見え方に触れることができとても楽しかったです。今日見た２枚の絵をまたどこかで見たら、今日のことを思い出すのかなと思います。
- アート鑑賞して、思ったことを言葉にすることはなかなかないし、それを言葉にすることで、こんなに人それぞれ感じ方が違う、ということがよく分かり、話をするよりも楽しかったです。
- 展示室で鑑賞してはじめて気がついたことがあった。これを誰かに共有したかったが手話通訳の方が近くにおられず伝えられなかったことが心残りでした。（中略）本物を見て気づいたことを話す場を設けていただけると良いなと思いました。
- 筆談×アートに「？？？」となりつつ来ましたが、筆談だからこそ出来ることがたくさんあるんだ！と分かりました。かきこむことでイメージがどんどんふくらむのがおもしろかったです。２つ目の絵はタイトルを知らないままの鑑賞だから、とてもじっくり見れたような気がします。

6. 研究・普及活動

6-1 研究会「ひらくラボ」実施報告書

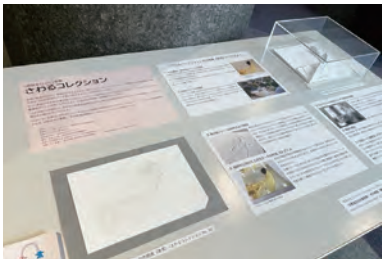
2022 年度事業において、視覚だけによらない美術鑑賞の取り組みや、絵画作品の触図制作・活用をテーマに、各地の美術館の事例を持ち寄り検討することを目的として研究会「ひらくラボ」を実施した。2023 年度はこの成果を踏まえ、当日の事例発表およびディスカッションの内容をまとめた報告書を作成した。「感覚をひらく」事業のウェブサイトにて PDF 版を公開している。

「ひらくラボ」実施報告書へのリンク

6-2 活動紹介コーナー

京都国立近代美術館の館内にて、「感覚をひらく」事業の制作物・ワークショップなどの取り組みについて紹介するコーナーを設けている。2022 年 7 月下旬からは展示場所を 1 階ロビーから 4 階ロビーへと移し、展示内容を随時更新しながら実施している。

2024 年 1 月現在、2022 年度事業で発行した「さわるコレクション No.10 竹内栖鳳《春雪》」ができるまでを紹介した展示等を行っている。ここではアーティスト、視覚に障害のある方、美術館、印刷加工会社の連携プロセスを紹介しているほか、検討段階でアーティストの中谷ミチコ氏が制作した石膏によるレリーフの実物を展示している。



おわりに

「感覚をひらく」事業では昨年度から、抽象絵画の世界を「みる」だけではない方法で味わうことに向き合ってきました。今年度は「ABC プロジェクト」と「さわるコレクション」を一般に公開し、多くの方々とこのテーマについて考える機会をつくることができました。本事業にご支援・ご協力を頂いた全ての方へ、御礼申し上げます。

ABC プロジェクトでは、長谷川三郎《蝶の軌跡》をめぐってプロジェクトメンバーの中村さん・安原さんと何度も議論を重ねることで、作品の読み解きがどんどん広がっていきました。そうした経験をもとに、美術館での展示は、あらかじめ設定した価値やみかたに鑑賞者をいざなうのではなく、作品を出発点として自由に想像を膨らませることができるような場にできないか、という意識が生まれてきました。

展示の会期中、中村さんが制作された触図の前では、さまざまな反応が起こっていました。小学校低学年の子どもたちは、先生と一緒に「どんな音が聞こえてくる？」「物語を考えてみよう」と触図のあちこちへ手を伸ばしたり、近寄ったり離れたりしながら時間を過ごしていました。盲学校の中学生たちは、触図の抽象的な形のひとつひとつに自分の今の心情を重ね合わせることで、言葉にしづらい思いと向き合っていました。また、ある車いすユーザーの方からは、手前にせり出すように斜めに展示された触図は下に足が入るので作品をより近くで体験できて嬉しいという声をいただきました。

「感覚をひらく」事業では「誰もが楽しめる鑑賞のあり方を考える」ことを掲げています。これまでは「みんなでさわってみる」「みんなで対話してみる」という風に、何か一つの鑑賞方法を一緒に試すことで、美術鑑賞の可能性を広げようと試みてきました。ですが本来、作品に向き合う方法や道すじは限定できるものではなく、さまざまあるはずです。作品を前にした時、見たりさわったり対話したり想像したりと、自分なりに楽しみ方を選択しながら過ごせることが、ユニバーサルな美術鑑賞の実現には必要ではないでしょうか。事業の立ち上げから７年、改めて事業目標としている「誰もが楽しめる」という言葉の重みを感じています。今後は一層、ひとりひとりの鑑賞者の体験や作品との間に生まれる物語に丁寧に寄り添いながら、実践を続けていければと考えています。

令和６年２月26日

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
事務局（京都国立近代美術館 研究員）
松山 沙樹

新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会規約

（名　称）
第１条　本実行委員会は、新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会（以下「実行委員会」という。）と称する。

（目　的）
第２条　実行委員会は、美術館の特性を活かしながら、地域の美術館・博物館、特別支援学校、大学等のネットワークを構築し、障害の有無に関わらず誰もが楽しめるユニバーサルな美術鑑賞プログラムを創造推進することを目的とする。

（事務局）
第３条　事務局は事業中核館（京都国立近代美術館）に置く。
２ 事務局に事務局長を置く。 事務局長は、中核館（京都国立近代美術館）総務課長がその任にあたる。
３ 前２項に定めるもののほか、事務局の運営に関して必要な事項は、委員長が定める。

（事　業）
第４条　実行委員会は、第２条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。
（１）新たな美術鑑賞プログラムの構築に向けた各種行事の開催に関すること。
（２）障害者に向けた美術館活動、文化事業等についての調査・研究。
（３）新たな美術鑑賞プログラムの構築に向けた情報発信に関すること。
（４）その他、第２条に掲げる目的を達成するために必要な事業。

（所掌事務）
第５条　実行委員会は、第２条に掲げる目的を達成するため、次の各号に掲げる事務を行う。
（１）事業の企画及び実施に関すること。
（２）事業に必要な資金についての計画及び調達に関すること。
（３）事業における関係団体との連絡調整に関すること。
（４）事業の検証・評価に関すること。
（５）前各号に定めるもののほか、設置目的を達成するために必要な事務。

（組　織）
第６条　実行委員会の構成は、別表のとおりとする。
（１）実行委員会に、委員長、副委員長、事務局長、監事を置く。
（２）委員長は、事業中核館の代表者（京都国立近代美術館）をもって充てる。
（３）副委員長、事務局長及び監事は、委員長が指名する。
（４）委員長は、委員会を代表し、会務を総括する。
（５）副委員長は委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は欠けたときは、その職務を代理する。
（６）事務局長は、実行委員会事務局を総括する。
（７）監事は、委員会の会計及び事務を監査する。

（補　足）
第７条　この規約に定めるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な事項については、委員長が定める。

附　則
この規約は、令和５年６月７日から施行する。

謝辞

本事業の実施にあたり、以下の皆様をはじめ多くの方々からご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、50 音順）

芦田裕子、一宮文香、岩井洋志、鈴木啓介、丹正和臣、茶圓彩、仁科豪志、正井隆晶、松永亮太、松見拓也、水上明彦、宮本千春、山下完和、山本利和、和田史

映像・写真撮影：表恒匡、衣笠名津美、麥生田兵吾、守屋友樹

令和 5 年度 文化庁 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）

感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業
令和 5 年度 実施報告書

企画・制作　京都国立近代美術館 教育普及室
松山沙樹
牧口千夏
渡川智子
吉澤あき

デザイン　桑田知明
印刷・製本　株式会社グラフィック
発　行　令和 6 年 2 月 29 日
発行者　新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業実行委員会
〒 606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 26-1　京都国立近代美術館内
TEL. 075-761-4111（代表）　FAX. 075-771-5792
https://www.momak.go.jp/senses
© 京都国立近代美術館　無断転載厳禁

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

本報告書は、「感覚をひらく―新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」（令和5年度 文化庁Innovate MUSEUM 事業）の一環として発行するものです。
© The National Museum of Modern Art, Kyoto